



芹沢銈介の生涯

明治28(1895)年	誕生	5月13日、静岡市の呉服太物卸小売商・大石角次郎、あいの次男として生まれる
大正5(1916)年	21歳	東京高等工業学校図案科卒業、静岡市の生家に帰る
大正6(1917)年	22歳	芹沢たよと結婚。長女・規恵誕生
大正8(1919)年	24歳	このころから小絵馬の収集を始める。長男・長介誕生
大正11(1922)年	27歳	大阪府立商品陳列所を退職。次女・和喜誕生
昭和2(1927)年	32歳	朝鮮旅行の船中で柳宗悦の論文「工藝の道」を読み感動。柳が小絵馬の収集を見るため芹沢宅を訪問
昭和3(1928)年	33歳	大正記念国産振興博覧会に柳たちが出品した「民藝館」を観覧、沖縄の紅型風呂敷に唖目
昭和4(1929)年	34歳	第4回国画会展にろうけつ染の「紺地杓子菜文麻地壁掛」を初出品。国画奨学賞受賞
昭和6(1931)年	36歳	雑誌「工藝」の型染布表紙を1年間担当。青森の旅に出て、南部小絵馬などを見出す。三女・とし誕生
昭和9(1934)年	39歳	東京・蒲田に転居。柳とともに宮城の旅に出る
昭和11(1936)年	41歳	日本民藝館開館
昭和12(1937)年	42歳	柳とともに庄内地方の民藝品を調査
昭和14(1939)年	44歳	初の沖縄旅行。那覇で紅型の技を学ぶ
昭和16(1941)年	46歳	「日本現代民藝特別展」開催。同展のために「日本民藝地図」を制作。東北地方で民藝品制作指導にあたる
昭和19(1944)年	49歳	柳とともに秋田県角館で樺細工指導を行う
昭和20(1945)年	50歳	戦災で工房、家屋などの全財産焼失。日本民藝館に寄宿し、型染カレンダーを創始
昭和22(1947)年	52歳	青山南町に転居。次女・和喜が仙台の伊藤家に嫁ぐ
昭和26(1951)年	56歳	蒲田の土地を購入、北陸銀行の宿直室と物置を移築して住居と仕事場にする
昭和30(1955)年	60歳	有限会社「芹沢染紙研究所」設立
昭和31(1956)年	61歳	型絵染で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定
昭和32(1957)年	62歳	宮城県・石越町の板倉を蒲田へ移築
昭和36(1961)年	66歳	柳宗悦逝去。民藝同人らと祭壇を作る
昭和38(1963)年	68歳	芹沢が設計した大原美術館の芹沢染色館、棟方版画館落成。長男・長介が仙台に転居
昭和41(1966)年	71歳	近東とヨーロッパ各国を巡遊。紫綬褒章受章
昭和43(1968)年	73歳	宮殿小食堂および後席の間型絵染額2点を制作
昭和49(1974)年	79歳	夫婦で水沢、平泉、一関、鳴子、鬼首へ旅行
昭和51(1976)年	81歳	フランス国立グラン・パレ美術館で「芹沢銈介展」を開催。文化功労者に選ばれる
昭和56(1981)年	86歳	静岡市立芹沢銈介美術館開館。フランス政府より芸術文化功労章授与
昭和58(1983)年	88歳	妻・たよ逝去(享年84)。蒲田の自宅で倒れ入院
昭和59(1984)年		心不全のため逝去(享年88)
平成元(1989)年		東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館開館

資料提供／ 濱田淑子

講師：濱田淑子氏



昭和19年、宮城県生まれ。東北大学大学院文学研究科(美術史学)修了。東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館の設立に従事し、開館以降は学芸員として勤務。仙台市史美術工芸編、青森県史文化財編執筆。現在、宮城県民芸協会会長を務めている。



深まる一冊

別冊太陽 日本のこころ185
染色の挑戦 芹沢銈介
世界は模様に満ちている(平凡社)

柳宗悦との交流や、紅型に心酔して型絵染作家として活躍する芹沢の足跡を、誕生から生涯を通じて、作品とともに紹介(版元在庫無し)



TOHOKU

東北

第6回 第2部

けいすけ
芹沢銈介が残した
東北の美

型絵染の人間国宝と「民藝」の世界



2019.9.28(SAT)16:30

芹沢銈介が残した東北の美 型絵染の人間国宝と「民藝」の世界



「東北窯めぐり六曲屏風」
東北行脚で出会った窯場風景を藍色で、
東北の風物を朱色と黄土色で描いた作品
(東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館蔵)

水洗いをして帳場に干すまですべての作業工程を一貫して自分で行う。芹沢の創作の特徴は、大量のスケッチから作る、人間、植物、風景、動物、幾何学模様などの多彩な下絵。それらの模様は具象から余分なものをそぎ落とし、模様として抽象化することにより、描くものの本質を際立たせるアートである。若き日には画家を志した

芹沢だが、自身を芸術家とも、作品を芸術とも思っていない。敬愛する柳の思想と同じく、作品は実用することを第一とし、自身もまた職人であることに徹したのである。そこに民藝の作家、芹沢銈介の本質を垣間見ることができる。

1 手仕事に魅了されていった師・柳宗悦との東北めぐり

昭和31年、型絵染の作家として人間国宝に認定された芹沢銈介。彼は東北と縁が深く、その創作に東北の風土が少なからぬ影響を与えた。昭和6年以降、芹沢は幾度か東北を旅している。その多くは、民藝運動を興した思想家で、師と仰いだ柳宗悦に同行し、東北の手仕事の現場を訪ねる旅だった。柳が唱えた「民藝」とは、名もなき職人が日用品として作った工芸品の美を尊ぶ美意識であり、生活観である。柳との旅を通じ、芹沢は「用の美」と、その作り手たちに共感を寄せていった。地方の伝統的な工芸は当時、衰退の一途をたどっていたが、柳が著書で「手仕事の国」と呼ぶほど、東北には多くの工芸が継承されていた。その手仕事に魅せられた芹沢は、自らの作品に東北の風土を投影し、作り手の職人たちとも深く関わるようになっていった。



通常、型染の工程は分業で行われるが、芹沢は一貫して自分の手で行う新しい染色の形を作り上げた
(撮影／藤森武)

2 膨大なスケッチから生まれる多彩な図柄とシンプルな模様



「頭の前から爪先まで紅型のことでいっぱいです」と語るほど紅型に惚れ込んだ(撮影／藤森武)

芹沢銈介は沖縄の染物、紅型に出合い衝撃を受け、昭和5年ごろから型染を中心とした染色を始める。型絵染とは、芹沢独自の型染の技法だ。和紙に下絵を描き、型紙を彫り、布や紙に防染糊を置いて色を挿し、

3 東北の手仕事を存続させた民藝の作家たちの助言と指導

柳と芹沢らの東北めぐりは、産地を訪ねて工芸品を収集するだけではなく、民藝の価値を説き、伝統を守る職人たちを励ました。具体的な助言やデザイン指導なども積極的に行っている。例えば当



各地の民藝を紹介した柳の代表作『手仕事の日本』。初版本は芹沢の装丁
(静岡市立芹沢銈介美術工芸館蔵)

時、秋田の樺細工は人気を失い、粗悪なものになりつつあった。柳は樺細工職人を東京の日本民藝館に呼び寄せて講習会を開き、さらに芹沢を伴って角館まで行き、芹沢にデザインを指導させた。青森のこぎん刺し、各地の焼き物、編み組細工

「風の字のれん」
独創的な文字デザインも芹沢作品の特徴。パリでの芹沢銈介展のポスターに採用された
(東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館蔵)

など、民藝の作家たちやその共鳴者らにより、今日まで存続してきた手仕事は少なくない。終



生、職人に徹した芹沢は、戦後の昭和30年に芹沢染紙研究所を設けて多くの弟子を抱え、染色の量産を実現した。手仕事の工芸品だけでなく、一つのことに従事して黙々ともものづくりに励む職人の姿を愛した人である。芹沢の型絵染は、彼に影響を与えた手仕事の職人たちへの賛美ともいえるだろう。